

B 指導経過記録（記入例）

1 指導事例の主たるカテゴリー

①リハビリ 2 看護サービス 3 認知症 4 医療連携 ⑤家族支援 6 社会資源 7 多様なサービス

2 主任介護支援専門員（介護支援専門員経験 年、主任介護支援専門員実務経験 年）

3 指導者（主任介護支援専門員）と相談者（事例担当介護支援専門員）の関係

① 同一事業所 2 地域包括支援センターと管轄地域の事業所 3 その他（ ）

4 相談者の介護支援専門員の属性経験年数 ①（約1年1ヶ月） ②基礎資格（介護福祉士）

5 指導事例として選定した理由（研修での検討したい内容・ポイント）

○同一事業所のA介護支援専門員がケアプランを見ながら悩んでいる様子だった。

Aは、自分から積極的に相談する性格でないため、こちらから困っていることはないか確認したところ、困っていると回答があったため指導を開始

○草案内容（下記）を聞き、指導すれば事例の課題が改善すると判断をした。

○Aは2年目を迎える介護支援専門員で、大分業務に慣れてきたところであり、この事例に主任介護支援専門員として関わり複数回指導することで、Aのケアマネジメント能力の向上が期待できると判断した。

6 相談内容

(1) 相談内容

平成28年5月からF（87歳 男性）さんの支援を行っているが、生活に対する意欲が低く、何もせずに寝てばかりいるため、ADLの低下をきたしている。要介護度は、更新結果1から2に悪化した。どうしたら、生活に対する意欲を取り戻し、積極的にリハビリや日々の生活の中で自分のできるところに取り組んでいただけるかが、わからずに困っているとのこと

(2) 主任介護支援専門員からみたこの事例のケアマネジメント（相談者含む）の課題

●事例の課題

相談内容のとおり、事例の課題は、Fさんの意欲低下、それに基づくADLの低下、その結果要介護度の上昇をきたしている。

●担当介護支援専門員の課題

そのため、まずAにFさんの意欲低下の原因や問題点等をどのように分析しているのか確認してみたが整理はできていなかった。原因を整理できていないことが、意欲低下を改善するための具体的な取り組みが行えていないことに繋がっていると思われる。

なぜ、Fさんの原因を整理できていないかについては、まだ経験年数が浅く、情報を整理する方法が身につけていないことが課題であると考えた。

7 具体的な指導経過記録(指導開始以降)

指導の概要（指導を開始した理由、指導経過および指導結果の概要）			
相談を受けた段階で、Fさんの意欲低下の原因について情報整理の必要性を感じ、『意欲の低下の原因』や『問題点』等进行分析して整理したところ、妻の過介助が要因の一つである事が分かった。廃用症候群モデルに対するリハビリテーションについて説明し、担当者会議でのポイントや、モニタリングの視点について助言を行った。			
日付	相談内容	指導内容と指導の視点	指導結果・効果
H29 年 7 月 7 日	Fさんの支援を行っているが生活全般に対する意欲が低く、何もせずに寝てばかりいるため、ADLの低下が顕著である。要介護度は、更新の結果1から2に上昇した。どうしたら、生活に対する意欲を取り戻し、積極的にリハビリテーションや日々の生活の中で自分のできることに取り組んで貰えるかが分からず困っている。	指導では、Aが理解しているか表情を必ず観察し、批判し萎縮させないよう気を付けた。 ＜指導の視点＞ 相談内容を次のとおり分析した。 ①Fさんの状態は、落ち着いており、緊急に対応しなければならないケースではない。 ②Fさんが自立した日常生活を送るには、阻害原因と考えられる意欲の落ち込みの理由をしっかりと分析する必要がある。 ③Aは実務に就いて2年目の介護支援専門員であり、まずは、自分でこのケースの問題点を整理することがAのケアマネジメント力向上につながる。 ＜指導内容＞ ①情報を整理するシートを活用して、Fさんに関する情報を整理して、意欲低下の原因や問題点、ストグレンス（維持・改善の要素・利点）分析すること。①②によって、どのような気づきがあったかをまとめること。 上記、実施後にAさんについて、一緒に考えることとする。	

<p>H29 年 8 月 1 日 1 回目指導 (A による整理し た内容の確認 の途中まで実 施</p>		<p><指導内容> ○情報を整理したことで、A 自身が気づいたことを説明してもらった。 ○次に、情報整理シートに記載した内容について、A に対して質問し回答してもらう方法での指導を 2 回実施した。 ○脳卒中モデルと廃用症候群モデルに対するリハビリテーションの説明を行った。リハビリテーションの評価の重要性についても説明した。理解できていないような表情をした時には、丁寧に伝えるように努めた。</p>	<p>指導の結果、A 自身が次の点に気付くことが出来た。 ○Fさんは、妻と一緒にいたいという気持ちがとても強いということ ○本人に何が出来るかを PT とも相談して確認する必要があること ○PT は気力をあげるのが上手なので、その方法を確認すること ○ADL の低下を防ぐためには、妻の過介助への対応が必要であること。 上記の気づいた点を踏まえたケアプラン（案）を作成した。</p>
<p>H29 年 9 月 2 日 2 回目指導</p>		<p><指導の視点> A の説明等から本事例を次のとおり分析した。 ①生活への意欲低下があり、自分でできることも行わない生活のため ADL の低下が顕著 ②Fさんには、身体の病気があるわけではなく PT は活動量が低いことを指摘しているため、リハビリテーション等による活動量の増加が必要 ③活動量の低下の原因には、本人の意欲低下とともに、妻の過介助も考えられ、過介助を解決する必要がある。 ④意欲の低い本人の意向の中で、唯一高いのは「妻と一緒にいたい」ということなので、その気持ちを大切に、リハビリテーションやできることに取組んでもらう。</p> <p>上記の指導の視点より A への質問・指導は次の点に配慮し実施することとした。 ①意欲低下の原因と意欲向上の可能性に気づいてもらう。</p>	

	<p>今回見直ししたケアプラン（原案）を提案するサービス担当者会議におけるポイントを教えて欲しい。</p>	<p>③2 表作成の際には、本人の意向である「妻と一緒にいたい」をどう活かし、現在の悪循環から脱却できるかをしっかり考えさせる。本人が少しでも意欲的になれるような目標や支援を取り入れる。PT による動作能力の評価を位置づける。</p> <p>理学療法士から下記の点について、発言して貰うように助言した。</p> <p>①ADL で本人がどこまでできるのか、介助が必要な部分はどの部分なのか。</p> <p>②IADL で本人の能力でできる可能性があること</p>	
<p>H29 年 9 月 22 日</p>	<p>サービス実施後に気を付ける点を教えて欲しい。</p>	<p>サービス実施後は、次のことに気を付けるように助言した。</p> <p>①本人の気持ちが前向きになることが、大事なので、本人との会話ではそのことを意識するようにケアチームに伝えること。</p> <p>②妻の過介助については、夫の介護を認め、妻の気持ちを十分にくみ取った上で、必要な介護の範囲を伝える。</p>	<p>次のような報告を受けた。</p> <p>①サービス担当者会議で指導後のケアプラン（原案）を提案</p> <p>②修正ケアプラン（原案）が同意され、新たなケアプランによる内容でサービス提供を開始することとなった。</p>
<p>H29 年 10 月 5 日</p>	<p>モリタニングに向けて気を付ける点を教えて欲しい。</p>	<p>「洗濯物畳み」に取り組めるようになったことをケアチームで情報を共有し、関係者が本人との会話の話題にして褒めると良い。</p> <p>また、リハビリテーションの目標達成にあたって PT から提案された介助を行えているかを確認すること。</p>	<p>A から次のような報告があった。</p> <p>本人の気持ちが前向きになるように、本人、PT と一緒に「できることリスト」をつくり、リハビリのつもりで洗濯物を畳むことに少しずつ取り組んでもらうようになった。</p>
<p>H30 1 月 15 日</p>			<p>○A から次のようなモリタニングの報告を受けた。</p>

	<p>妻の過介助の解決策等、今後に向けての助言が欲しい。</p>	<p>①ADL 面での能力が高いにも関わらず、意欲が低く何も行わないが最大の課題であったが、家事に取り組めるようになったのは大きな一歩である。今後も焦らずにケアチームで協力して「出来ることリスト」のメニューを増やして自信が持てるよう支援することが大切。</p> <p>②高齢の妻の介護能力や健康状態が現状の生活の継続に不可欠であり、妻のレスパイトの検討も必要</p> <p>③リハビリテーションの効果が上がり、生活動作能力が高まることで妻の負担軽減にも繋がるので、今後も継続する。</p> <p>④妻の過介助や、他の人とのコミュニケーションを課題としてとらえているのであれば、それを解決するためのサービスやサポートが地域に不足しているために解決できていないかを整理してみるとよい。</p> <p>⑤整理した結果、地域に必要なサービスやサポートを発見出来たらサービス等の必要性を地域包括支援センターと一緒に提案していきたい。</p>	<p>①洗濯物畳み以外に「できることリスト」は増えていないが、着実に F さんの日課になっている。</p> <p>②体調に関する不安は、医師や看護師に相談することで、本人の気持ちが落ち着いているが、否定的な言葉は現在も続いている。</p> <p>③妻の負担となっていた起上りや立上りは、PT の助言により見守りのみで行えるようになっていく。</p> <p>④妻の過介助については、妻の気持ちを汲み取り適切な範囲で行うように伝えたが、まだ続いている。妻以外は、PT に提案された介助を適切に行っている。</p> <p>⑤他の人ともっとコミュニケーションを取ってもらいたい。気持ちがもっと前向きになるかもしれない。</p>
--	----------------------------------	---	---

8 指導の効果と指導後に残された課題（ケース・相談者・主任介護支援専門員）の課題

指導の効果

- ①事例については、ADL 面での能力が高いにも関わらず、意欲が低く何も行わないことが最大の課題であったが、家事（洗濯物畳み）に取り組めるようになった。
- ②A については、情報を分析する方法を身に付けさせることが出来た。他の事例でも、課題があった時には、このようにまずは自分で分析するようになった。
- ③サービス担当者会議で、専門職に積極的に意見を確認するようになった。

ケースの課題

- ①妻の過介助の問題については、まだ解決できていない。A によると本人が不安を訴えると本人が不安を訴えると妻が過介助してしまうことが課題であること。1 月 15 日以降 F が課題を再整理した結果、夫婦別々の時間の確保と、妻と同じ立場の介護者との情報交換による過介助の防止が必要であり、介護者の会等があればよいと相談された。

相談者の課題

今回指導したことで、指導の効果に記載したとおり、A は課題がある場合は、積極的に分析し解決しようと努めるようになった。しかし、リハビリや福祉用具に関する知識は、十分に身につけていないため、知識を身に付けるための方法等を今後は教えていきたいと思う。

主任介護支援専門員の課題

- ①普段、自分も沢山のケースを持っているため、新人の A の指導をあまり行うことが出来ていなかった。事業所全体のケアマネジメントの質を向上させるために、今後も少しでも相談に乗れる機会を設ける必要があると考えた。
- ②また、指導する際に、強い言い方をしてしまうことがあるので、気を付ける必要があると感じた。相談しやすい雰囲気を持つようにする必要がある。